

ビジネスマンを目指す若者達に“生きる刺激”を与えた 音楽の不思議な力

ふるや さおり
風呂矢 早織

目 次

1. はじめに
2. 変化するコミュニケーションのあり方
 - 2-1 講義の主旨
 - 2-2 コミュニケーション能力が低下する原因
 - 2-3 ヘッドフォンの誕生
3. 見極める力、心の目を養う
 - 3-1 講義の主旨
 - 3-2 歌謡曲とバブル経済（作詞家・阿久悠）
4. 音楽とファッションへの探究心
 - 4-1 講義の主旨
 - 4-2 ヒップホップカルチャーとファッション
 - 4-3 黒人差別とファッション
5. 音楽パフォーマンスによる心の活性化
 - 5-1 講義の主旨
 - 5-2 実施方法
 - 5-3 演奏した学生達の反応
 - 5-4 客観的な学生達の反応
 - 5-5 クラス大合唱 学生達の反応
 - 5-6 音に向かう積極性
6. おわりに

1. はじめに

音楽は人間の心の叫びを代弁してくれるものである。現代のストレス社会で生きる人間にとって音楽を聴くことは、鬱憤を晴らすための必要不可欠な手段のひとつである。

名古屋商科大学において2007年度～2012年度の間に、自ら教鞭を執り、ビジネスマンを目指す20代を中心とした社会科学系の学生達を対象に、一般教養科目「音楽と学生生活(教科名)」を開講した。受講生は、毎年度、約120～180名で、「TVやラジオで耳にした曲を詳しく知ることができて面白かった。」「みんなで歌を歌うことができて楽しかった。」等、評判を呼んだ。毎年、口コミで受講者数が増えた。主に、ロック、ジャズ、ミュージカル、日本歌謡史等の歴史に触れ、幅広い視点から音楽を取り上げた。

本文では、実施した講義の中で、特に印象深い内容を凝縮させ、音楽家の観点から、将来、企業に就職する学生達に伝えたい音楽がその時代の背景や経済事情とどのように関係しているか、また、音楽や人々の考え方がどうあるべきかという内容を述べる。人間として、右脳の五感の感覚や感性の働きが鈍ってしまえば、バランスが悪く、機械のような人間になってしまう危険性がある。豊かな感性を育むためにも、「人と人とのコミュニケーションのあり方」、「心

の目を養うこと」や「心の活性化」について特に着目した。

第2章～第5章で、講義内容を中心に、学生の感想と私の考えについて述べる。

2. 変化するコミュニケーションのあり方

2-1 講義の主旨

日本歌謡史・70年代をテーマに、音楽の観点から、人々のコミュニケーションのあり方を考えた。当時、「ヘッドフォン」誕生から、人々のコミュニケーションのあり方が変化した。それが現代人の性質と共通していることを述べている。近年、コミュニケーションツールの目まぐるしい発展により、便利になった反面、人間としての本質的なあり方を改めて見直さなければいけない。講義では、それらの疑問点を示した。また、会話をする動作には、自分の声を使った音楽的な表現要素を含んでおり、それによって自分の感情を伝えることが可能である。しかし、電子メールでは、音楽的な方法で感情を伝えることは不可能であり、顔文字や絵文字に頼らなければならない。そのような方法には、音楽的な方法に比べ感情が伝わりにくい。

2-2 コミュニケーション能力が低下する原因

人間が生活する中で、コミュニケーションを図らずに生きていくことは不可能である。しかし近年において、そのコミュニケーション能力の低下が著しい。コミュニケーションツールを間違った方向で利用している人も少なくない。現代社会に生きる人々のほとんどが伝達手段として、電子メールを使い、手紙を書く行為や相手と会話することも簡略化されつつある。メールでの会話はできるが、相手の目を見て実際に会話することが苦手という人が増えている。話しにくい内容も、メールにしてしまえば手軽ではあるが、受け取った相手がどのように解釈するか、文面だけでは理解しがたい内容もある。便利で手軽と思って起こした行動が、実は、相手を傷つけ、取り返しのつかない問題に発展することもあり得る。誤解などが生じないためにも、一番大切なことは相手の目を見て、自分の意思を心からしっかりと伝えることである。メールを利用するばかりでなく、手紙を書いたほうが、相手に気持ちがより伝わりやすい場合もある。人々は便利に成長しすぎたコミュニケーションツールに頼りすぎて、本来の人間の持つべき大切なものを忘れがちになってしまっている。従って、コミュニケーションツールはTPOに合わせて上手く利用しなければいけない。

2-3 ヘッドフォンの誕生

バスや電車に乗ると、必ずヘッドフォンをしながら音楽を聴いている若者達を目にする。

iPod、iPadやiPhone¹などを使いこなし、常に進化し続ける時代に適応する柔軟性を持っている。この「ヘッドフォンをして音楽を聴くスタイル」が、次第に人々のコミュニケーションや音楽との関わり方などに大きな変化をもたらした。

ヘッドフォンはすでに明治時代には存在したが、外出時に手軽に音楽を聴くことは不可能

¹ iPod/iPhone/iPadは、アップル社が開発した登録商標である。それぞれ持ち運びができ、「iPod」は、携帯音楽プレイヤー（2001年発売）、「iPhone」は、携帯情報端末（2007年発売）、「iPad」は、タブレット端末の機能を搭載している（2010年発売）。

だった。ウォークマン²が1970年後半に誕生したことにより、「音楽プレイヤーは携帯するもの」という概念が明確になる。しかし、それによってこれまでは流行歌が商店街などでいつでも流れ、不特定多数の人々の耳に留まり、周りと共有しあうことができたが、ヘッドフォンを付けてしまうと、それぞれが個別に好きな音楽だけを聴くようになるため、一人一人が音空間に閉じこもり、耳にバリアを張るようになってしまった。ヘッドフォンは自分が聴きたい音楽だけを聴けるという点で、効率のよい時間の使い方ができる。しかし、本来、歌というものは人と共有しあい、さまざまな受け取り方をされ、徐々に広がっていくものだが、それぞれが閉じこもってしまうと、同じ嗅覚を持つ仲間を探すにも困難である。「他人に干渉しないからこちらにも干渉しないでほしい」という暗黙のサインが個人主義へと変化してしまった。

この「ヘッドフォン」は、現在の「携帯電話」にも置き換えることができるだろう。進化が著しい「携帯電話」の登場とともに、家にある固定電話をほとんど利用しなくなった。これによって、家族のあり方もここ数年の間に随分変化した。以前なら、親が自分の子供の友人や交際相手の電話を受けることもあって、子供がどのような交友関係を築き上げているのかを知ることができ、周りを巻き込んで家族がコミュニケーションを図ることができた。しかし、今では、家族の交友関係や心理的变化に気づくことも鈍感になりつつある。もちろん携帯電話は、家族や周りに気を遣わず、すぐに会話したい相手と話すことができるとても便利な手段ではあるが、家族の一員が問題を抱えていたとしても、家族のコミュニケーションが不足していると、その危険信号を読み取ることすらできない。犯罪に巻き込まれる可能性もあり得るだろう。

現代のコミュニケーションツールと「ヘッドフォン」を例にあげて、共通点を述べてきた。これらを利用することは決して悪いことではないが、周りとのコミュニケーションを遮断し、個人主義、秘密主義になってしまうのは、人間としてとても悲しいことである。この問題は若者だけに限定するのではなく、全ての世代に関わる問題である。そのような点で、「身近な人々との音楽の共有が重要である」という認識を持ってコミュニケーションのあり方を改めて見直さなければいけない。

3. 見極める力、心の目を養う

3-1 講義の主旨

この内容は、日本歌謡史～80年代 バブル経済をテーマに取り上げた。教員として2年目を迎えた2008年には世界金融危機、リーマンショックが起り、アメリカの投資銀行であるリーマンブラザーズが破たんし、世界的金融危機に陥った。講義では日本の1980年代のバブル経済に遡り、作詞家・阿久悠の「時代おくれ」の歌詞が金融危機を暗示させるメッセージだったことを取り上げた。見た目だけの華やかさにだまされない、「見極める心の目を養うこと」が重要であることを示唆した。

3-2 歌謡曲とバブル経済（作詞家・阿久悠）

音楽は時代の景気の流れなどによってファッションと同じく、必ず流行というものがある。

² ウォークマン（WALKMAN）とは、ソニーが1979年に、携帯型ステレオカセットプレイヤーとして発売を開始したブランド名のこと。

そして、浮き沈みの激しい時代の流れにも敏感で、流行歌を聴けばその時代の背景や経済事情を窺うことができる。

1980年代、バブル景気に浮かれていた日本では、「リゾートソング」が存在した。これは、総合保養地域整備法（リゾート法）が、1987年に施行されたことにより旅行会社などのコマースソングとして、起用された。それらの明るい曲を聴くと、今にでもその保養地へ出かけてみたくなるような気持ちになった。そして、この時代、誰もが自信に満ち溢れ、日本が世界一の金持ちの国だと信じて疑わなかった。若者達は、派手で高価なファッションを身に纏い、夜はディスコ、そして海外旅行へと惜しまず出かけた。しかし、この華やいだ時代に誰もが気づかない観点から、物事を真っ直ぐ受け止めていた人物がいた。日本の歌謡界には欠かさない存在で、時代の空気をいち早く受け止めていた作詞家・阿久悠。彼は、歌詞を通して、時に人々へ疑問を投げかけていた。1986年、時代おくれ（歌・河島英五 作曲・森田公一）が誕生する。怖いもの知らずのこの時代の空気をそっと横目で眺めていたのが、阿久悠だった。全ての面で華やかさを好んだこの時代には、地味な歌詞であった。しかし、阿久悠は敢えてそれを選んだ。

「目立たぬように はしゃがぬように 似合わぬことは 無理をせず

人の心を見つめ続ける 時代おくれの 男になりたい」

“時代おくれ” より歌詞抜粋

このサウンドメッセージは、人々が慌てて大股で歩き、その一步一步に跨いで通り過ぎてはいけない景色が沢山あるのではないのかと人々に危険信号を送っていた。もちろんだが、当時の浮かれた日本人には、この阿久からのメッセージは「辛気くさい」と批判され、悲しくもその思いは届かなかった。

そして、時代は瞬間に変化しバブルがはじけた。当時、地味だ、物足りないヒットには及ばなかった時代おくれが、ようやく人々の心を動かし始めた。結局、“時代おくれ”と敬遠されたこの曲こそが、時代の先を行っていたのだった。若者達の間では、ファッションも音楽も、華やかな見た目というものが、まずは重要視されてしまう。しかし、もっとその奥に大切な価値が隠されていることを忘れてはならない。一方で、現代社会において、情報通信産業の発展が加速し、便利になった反面、人々は殺伐とした時間と戦っている。そんな社会だからこそ、阿久悠の時代おくれの歌詞は、これからも何かを置き去りにして生きてきた人々の心の穴を埋めてくれるに違いない。

4. 音楽とファッションへの探究心

4-1 講義の主旨

講義では、シリーズにわたり、アメリカ音楽を中心とする「ヒップホップ」「ロック」「ファンク」等の歴史や音楽的特徴を紹介した。その中で、アーティスト達のファッションには、魂の叫びというものが込められていた。日頃、何も知らずに着ていた服装に、こんな意味合いがあったのかと学生達が驚く一面も見られた。ファッションを意識する上で、ただ店頭に並んでいるものや、ファッション雑誌のモデルをそのままコピーするだけではなく、元々の歴史を知ることにより、「自分で自分をプロデュースできる人間に成長してほしい」、「周囲に踊らされず、自分を表現して堂々と胸を張ってほしい」という願いからこの時間を設けた。

4-2 ヒップホップカルチャーとファッション

ヒップホップを好む世界中の若者達の間で格好良いといわれる共通したファッションスタイルがある。それはいったいどういうものであるか、述べていきたい。

ヒップホップは、ラップと呼ばれる“韻を踏む”歌詞が特徴的で、ブレイクダンスやグラフィティとも強く結び付いている。1970年に、アメリカ ニューヨーク州マンハッタン島北東部にあるブロンクス地区のブロックパーティーから発生した。この地区は、主にアフリカ系アメリカ人、ヒスパニックを中心とした低所得者の移民区域で、ギャングやドラッグ等が蔓延る治安がよい地域としても知られている。

さて、このブロンクス地区のファッションの特徴として、本来の体型よりも大きめサイズの服装を好んで着る傾向にある。低所得である理由から、成長とともに、服装を買い換える余裕がなかったためである。他には、キャップ帽を買った時にメーカー名やサイズを示すために、つばの部分に貼ってあるステッカーをそのまま剥がさずに被るスタイルをよく目にするが、これは物をたびたび買う余裕のない黒人達が、「いつでも新品のものを身につけている」と主張しているのだ。少し見栄を張っているようにも見えるが、貧困の中にも堂々と胸を張ってファッションを表現する彼らの姿が現わされている。果たして、若者達はそれを理解しているのであろうか。

4-3 黒人差別とファッション

黒人ファッションは、長年にわたり白人から差別を受けてきたことが、大きく影響している。例として、ファンクバンド“Earth Wind & Fire”（アース・ウィンド&ファイアー）を取り上げた。

“Earth Wind & Fire”の属する音楽ジャンルは「ファンク」である。60年代後半、ソウルミュージックが低迷しつつあった頃に、入れ替わるように登場したのが「ファンク」だった。ブラックミュージック、ソウル、R&Bをルーツとし、軽快な細かいリズムの要素を取り入れた音楽である。音楽の特徴は、アフリカン・アメリカンの音楽の伝統とスピリチュアルな理想主義を融合させている。ヒット曲「宇宙のファンタジー」などをイメージさせる、宇宙をモチーフとした衣装の他に、髪型や靴にもこだわりがあった。

彼らの髪型はアフロヘアである。これは、自分達の存在を大きく表現するためである。すなわち、白人の陰に隠れない存在でありたいという象徴である。そして、彼らは厚底ブーツを好んだ。底を高くすることによって、黒人として差別を受けていた過去の歴史を打破し、白人と同等な地位でありたいことを表現している。脚を長く見せたいから厚底ブーツを履くわけではなく、「ヒップホップカルチャーとファッション」の章で述べたことと同様に、彼らの深い歴史が刻まれているのだ。

ここで学んだ黒人ファッションの歴史は、若者達の今後のファッションに対する視点を変えていくに違いない。従って、私達は、身の回りにあるものに対して、もっと好奇心や探究心を持つべきである。そして、ぶれない自分の個性というものを見つけ出すことが大切である。

5. 音楽パフォーマンスによる心の活性化

5-1 講義の主旨

音楽が学生達の心のモチベーションを引き上げ、積極性を高めることを示し、受身の姿勢で

はなく、見て、聴いて、実際に歌うなどのパフォーマンスがどれだけ大切かを示した。授業では、毎年度、楽器を演奏できる学生に、発表の場を設けた。また、受講生全員で、大合唱を行った。この時、教室が一瞬で音楽ホールへと変身した。以下の節では、実施方法と学生達の授業調査³のコメントなどを参考にし、実施体験をまとめた。

5-2 実施方法

まずは、クラスでアンケートを採り、希望者がいるかをチェックした。毎年度、3～5名ほどで、歌はもちろん、ギター、サックス、ドラム、ベースなどを演奏できる吹奏楽部、軽音楽部などの学生が多かった。

5-3 演奏した学生達の反応

「大勢のクラスメイトを前に演奏することは、緊張したが、なかなか100人以上集客するホールのような場所で演奏できるチャンスはないので、とても貴重な体験をした。」(学生Oくん)

³ 名古屋商科大学では期末の最終講義の時間に、聴講学生による授業調査が行なわれている。設問は10項目である。

その中に

A「私はこの授業に満足した」： 「学生の満足度」

B「私はこの授業に熱心に取り組んだ」： 「学生の熱心度」

C「先生の教え方には熱意が感じられた」： 「教師の熱意」

がある。それらは5段階表示で、5、4、3、2、1で評価されている。また授業に関する感想を書く欄がある。学生が記入した授業調査票を読み取ることにより授業について学生の受け止め方を理解することができる。例として2012年度後期に担当した科目の実例を示す。

I 科目「音楽と学生生活」(受講生135名)

学生の評価の比率(%)

評価	5	4	3	2	1	平均ポイント
A 学生の満足度	54.4	25.6	16.7	2.2	1.1	4.30
B 学生の熱心度	45.6	25.6	23.3	5.6	0.0	4.11
C 教師の熱意	61.1	26.7	12.2	0.0	0.0	4.49

平均ポイントとは評価の値の相加平均である。

「学生の満足度」で評価5は「非常に満足」、評価4は「満足」、評価3は「普通」、評価2は「不満足」、評価1は「非常に不満足」である。

「学生の熱心度」、「教師の熱心度」の評価も同様である。

II 科目「音楽表現・実技」(受講生 34名)

学生の評価の比率(%)

評価	5	4	3	2	1	平均ポイント
A 学生の満足度	92.0	4.0	4.0	0.0	0.0	4.88
B 学生の熱心度	76.0	16.0	8.0	0.0	0.0	4.68
C 教師の熱意	80.0	16.0	4.0	0.0	0.0	4.76

上記の図表の数値から、科目「音楽と学生生活」では「学生の満足度」で半数以上の学生が「非常に満足」と回答し、「満足」と回答した学生と合わせると80%の学生が満足度に肯定的に受け止めていることがわかる。また、「学生の熱心度」では70%の学生が前向き姿勢で教科に取り組んでいることがわかる。

科目「音楽表現・実技」ではさらに著しい傾向を示している。評価は非常に高く、「非常に満足」と回答した学生が90%を超え、「不満足」および「非常に不満足」とする学生はいなかった。この結果は、実技に極めて興味を持っているかを示している。



図1 生徒によるロックギターとキーボードの演奏風景



図2 生徒によるジャズベースの演奏風景

「音楽家への道の本気で志したい。」（学生Kくん）

など、プロの音楽家が顔負けするぐらい堂々としていた。この「度胸試し」のような体験は、後々、人前でプレゼンテーションを行う時や、ビジネスマンとして働いていく上で、難題を突きつけられた時でも、跳ね返すことができる、大きな自信へとつながるだろう。（図1、図2）

5-4 客観的な学生達の反応

「授業で紹介された作曲家の作品を、生で聴くことができ、感動した。」（学生Oさん）

柔軟に演奏対応ができる学生には、授業で紹介した作曲家の作品を演奏してもらった。それらの演奏は、聴いていた学生にインパクトを与えた。彼らは、教科書の活字を追いかけるだけでなく、明確に、歴史上の音楽家の特徴を捉えることができた。試験問題（実際に生演奏で聴いた作曲家に関するもの）の正解率がとても高かったことがそれを証明している。

「楽器を弾ける人は、格好よい。私も、社会人になったら、趣味でギターを始めたい。」

（学生Hくん）

「幼い頃にピアノを習っていたが、先生と練習が嫌いで辞めてしまった。でも、あの時辞めなければよかった。」

（学生Eさん）

やはり、学生達にとって、楽器を演奏できる人への憧れがとても強いことが理解できる。そして、実際に、目の前で演奏している姿を見て聴いて、その空気感を味わうことは、とても刺激的なのである。

5-5 クラス大合唱 学生達の反応

授業では、手拍子しながら歌えるゴスペル曲、映画「天使にラブソングを」の“Oh, Happy Day”などを歌った。その目的のひとつは、大学という現場では、高校までのように文化祭や体育祭で、クラス全員で何かをするというチャンスが減りつつあり、部活やサークルに所属したりしない限り、自分から何かを探して組織に関わらないと孤立してしまい、引きこもる学生



図3 クラス大合唱の風景

もいる。そういった生活を送る学生のことも考慮し、些細なことでも、何かひとつのことを、皆でやり遂げたという達成感を味わってもらいたかった。もうひとつは、「心を自由に解放させる」ということである。身体でリズムを感じ、声を出して歌うことで、スポーツと同様に、ストレスを発散させる場を与えた。まさか、自分達の専門分野ではない“音楽”を、実際に体験するとは、想像もしていなかった様で、驚きの目で反応していた。最初、一部の学生は、興味すら持たず、下ばかり向いている子もいたが、回数を重ねるたびに、前を向いて、身体を少し揺らしながら歌えるようになった。(図3)

インタビューした結果、合唱に関しての学生達の反応は次のとおりである。

「合唱は高校の音楽の授業以来で、まさか、大学でこんな沢山のクラスメイトと一緒に歌うとは、夢にも思っていなかった。大学時代のよい思い出ができた。」 (学生Mさん)

「試合に負けた時や、練習が思うようにいかない時、ここで歌うと気分がスッキリした。」 (学生Oさん)

そして、不登校で留年している学生の一人が、授業の最終日に話しかけてくれた。

「毎日、何をやりたいか目的が見つからず、学校を辞めたいと思っていたが、音楽の授業だけは、楽しいから休まず受講した。授業に休まず出席したことで、自信がついた。卒業を目指して励んでいきたい。」 (学生Sくん)

5-6 音に向かう積極性

このように、目の色を変えて、生き生きとした表情を浮かべて、教室を出て行く学生達を実際に見て、「音楽は生活の中で、必要不可欠なもの」であり、「後ろ向きな人間をポジティブな方向へと導いてくれる不思議なパワーを持っているのだ」と確信した。

この授業を過去に受講していた学生で、音楽の道を究めることを決意した卒業生がクラスを訪問し、演奏を披露してくれる機会にも恵まれた。この授業を受講したことがきっかけで、演奏家に憧れ、アメリカ音楽留学を志した卒業生もいる。もう一人は、すでにコンサートやライブ活動を行なっているギターリストだ。100名以上いる教室で、前に出て自分を表現すること(パフォーマンス)は、誰もがができることではない。その素晴らしい積極性にはとても感心した。

6. おわりに

ビジネスマンを目指している社会科学系学生に音楽教育を施す場が与えられた。音楽を専門分野としない社会科学系の学生が音楽に求めるものは何か、試行錯誤を繰り返しながら実施した。その際、大学教育の一環であり、大学生らしい知的好奇心を誘起させることに心がけた。また、意欲付けや実践力の育成に留意した。

社会の動向と音楽の関係は学生に理解して欲しい点であり、また、学生もそれに応えて興味を示してくれた。実践力の育成は器楽演奏を通じて行なった。演奏に参加した学生からは積極性を引き出すことができた。器楽演奏は実践力を引き出す重要なツールのひとつであった。学生が音楽を通じて前向きな姿勢になってくれることは教える立場からすれば嬉しいことである。

音楽は決して敷居の高いものではなく、人と共に時代を生き、それを映し出す鏡のような存在であることを改めて痛感した。人間形成のためにも、幅広い教養のひとつとして、音楽の知識を身につけてほしい。それはきっかけに過ぎないが、講義を通じて学生達は音楽からの大切なメッセージを感じ取ってくれたに違いない。

謝辞

6年間、社会科学系学生の教育現場で音楽を通じて教育に携わるという貴重な機会を与えて頂きました名古屋商科大学に感謝するとともに、論文執筆に関するアドバイスを下さった本学経営学部、磯谷彰男教授に深甚なる謝意を表します。

参考文献

- 西垣成雄著「音楽がわかる世界地図」ロコモーションパブリッシング 2007年
- 阿久悠著「企みの仕事術」KKロングセラーズ 2012年
- アランライト著「ヒストリー オブ ヒップホップ」シンコーミュージック 2002年
- 小沼純一著「あたらしい教科書 8 音楽」プチグラパブリッシング 2006年
- 速水健郎著「タイアップの歌謡史」洋泉社 2007年